



## 学術論文のオープンアクセス化

神成 文彦<sup>†</sup>

### Circulation of Academic Manuscripts in Open Access Systems

Fumihiko KANNARI<sup>†</sup>

昨今の海外学術雑誌への論文投稿で困惑している研究者の方は少なくはないのではなかろうか。2007年末に米国において米国国立衛生研究所(NIH)から研究予算補助を得て行った研究の成果は、発表後1年以内に公衆が無料で入手できる状態にしなければならないという法律が制定され、これを機に世界各国でこの対応が進められてきた。いわゆる学術論文のオープンアクセス化である。公衆が無料で入手できるということは、インターネット上で無償で自由に利用できることを指している。ただし、細部にわたっての理解は分かれているのも事実である。2002年に出されたベセスダ宣言では、無料で閲覧できるだけでなく、法的制限のない、自由な再利用についてもオープンアクセスの定義とされている。つまり、引用を明記することで自由にコピーや配布も認めている。この考え方自体は、情報を活用しようとする研究者にとっても、また自身の研究成果を広くサーキュレーションさせるためにも歓迎できる方策であろう。このオープンアクセスを達成するための手段は、研究者自身のWebサイトに論文のPDFを無料公開すればいいと考えている研究者もいるようであるが、掲載された論文をオープンアクセスする学術誌に投稿する方法がゴールドロードと呼ばれている正統派(?)である。

オープンアクセス以前の従来の学術雑誌では、学会会員として無料閲覧権を有してはいない学会誌においては、読者が料金を払っていた。あるいは、料金を払って契約している自機関の図書館のサイトから閲覧することを行っていた。オープンアクセスでは、費用を著者が支払うことで出版費用を賄い、読者は無料で閲覧できる。実はこの費用がかなり高い。もちろんページ数にもよるが、1件\$1,000を超えることは普通であり、標準ページ数を超えると\$2,000近くになることもある。もちろん、この掲載料は公的研究助成金や所属する大学、研究機関、企業が負担しているのが現状であろうが、あまりにも高価である。このオープンアクセス化に関しては、EUそして日本も米国の決定をほぼ追従している形になっており、文科省もオープンアクセス化を推奨している。話は逸れるが、現在、日本の大学院の博士論文は、国会図書館にそのコピーを納めるようにはなっておらず、各大学が機関リポジトリで公開することが義務付けられている。インターネットシステムの波及が学術公開の現場を大きく変えていることは事実である。

現状、Applied Physics Letter誌などを公刊するAmerican Institute of Physicsの学術雑誌においては、著者がオープンアクセス化するかどうかを選択する形式になっている。結果、オープンアクセスを選択すると掲載料は大きく跳ね上がる。光学の分野でインパクトファクタの高い、Optical Society(OSA)のOptics Expressはもともとオープンアクセス論文用のWeb論文誌(電子ジャーナル)であるので、標準ページ数6(実際、1ページの分量が1段組みで非常に少ない)以内で\$1,080である。他方、セルフアーカイブでオープンアクセスを達成しようとするコミュニティーもあり、成功例は物理学の分野でのarXivである。研究者らが公刊前のプレプリントを共有する仕組みである。

一方で、1990年頃から起きている別の大問題が、大学図書館における学術雑誌閲覧支出の高騰である。さらに、インターネットの発展とともに電子ジャーナルが増え始め、出版社と包括契約方式が一般的になった。ある出版社が発行している電子ジャーナルの大部分にアクセスする権利を一括して契約する方式である。しかし、1件の包括契約自体が極めて高額であるため国内の多くの大学が悲鳴を上げているのが現状である。

オープンアクセスの方法論、研究者の負担、図書館の負担という課題において現状は明らかに過渡期である。またこれらは、論文誌のサーキュレーションを反映するインパクトファクタ、個々の論文の引用度数にも影響してくるので、研究者のグローバルなキャリアパスの流動性、評価にも影響する事項である。

本誌「レーザー研究」は、筆者が編集委員長を務めていた時期の議論により、敢えて日本語を標準とした解説論文を中心とした編集により、最先端の研究・技術のを会員へ波及することを重要視し、加えて迅速な査読掲載でオリジナル論文を発信するという位置づけを継続している。インパクトファクタ計算の対象誌にはなっていない。現状では科学技術振興機構のJ-STAGEにおいて1~39巻の論文が無料で公開されている。学会Webにおける最新論文誌の論文公開により

<sup>†</sup> 慶應義塾大学 理工学部電子工学科 (〒223-8522 神奈川県横浜市港北区日吉3-14-1)

<sup>†</sup> Department of Electronics and Electrical Engineering, Keio University, 3-14-1, Hiyoshi, Kohoku-ku, Yokohama, Kanagawa 223-8522

迅速に広く公開することを行えば、著者にとってメリットは大きいですが、一方で会費を払っている会員の特典性が失われる。そこで、出版後一定期間は会員にのみ公開し、期間終了後はオープンアクセス化する方向で理事会、編集委員会において現在検討中である。

レーザー、光学分野もその研究内容は広範囲になり、インパクトファクタ対象誌の条件である、2人の査読者とEditorによるチェックを満たしている状況においても、たった2人の査読者の視点(専門性)に掲載の可否が大きく依存してしまうことの弊害も生まれつつある。最近、査読候補者を筆者が投稿時にリストアップする方式が一般的で、逆に競合している研究者を理由に査読を廻してほしくない研究者のリストも書き込めるようになっている学会誌もある。分野が広範囲になった結果として査読できる研究者が見つからないと、速報性を売りものにしていく論文誌ではたとえ一流雑誌であってもたった1名の査読者のコメントで戻ってくる経験を筆者は複数回経験しており、Peer Reviewの基本的な理念が揺らいでいるようにさえも映る。また、査読する側も論文査読のリテラシー教育が全くないままに、何となく自己流でやっているのが現状でもある。筆者は、基本は玉稿を取りこぼさないというのが査読の際の基本であり、注文を多くつけることで相対的に上から目線になることで溜飲を下げるのは間違った査読であるといつも自分に言い聞かせている。論文の最終的な価値は、どの雑誌に掲載されたかではなく、やはりその引用度である。逆に言うと、真の価値は読者が判定するのであって、論文誌、査読者、Editorが判定するわけではない。ただし、引用度も雑誌に掲載された論文が引用している必要があり、研究者が自分の研究において実際には非常に参考にしたとしても事実はそのままでは外には表れてこない。arXivのようなコミュニティーのセルフアーカイブに成果を持ち寄り、本当にいい論文だと思った読者が「いいね!」をつける方式でも評価は間違わないとは思っているのであるが、ただし、もう少しルールが必要であろう。いずれにしても今の過渡期を経て、どういう状態に最適化されるかは注目したい。

#### 参考文献

- 1) 倉田 敬子：学術情報流通とオープンアクセス(勁草書房、2007)。
- 2) 佐藤 翔：情報管理 **56** (2013) 414。